

「異文化を生きる」飯泉菜穂子（国立民族学博物館特任教授）

(1) 異文化留学 2020年11月7日刊行

大学に入学した翌日に、生まれて初めてろう者に出会った。以来、私はずっと手話の世界にいる。現場の手話通訳、手話通訳を養成する学校の教員を経て、現在の職場では学術という専門領域で活躍できる手話通訳者を増やすための教育・研修事業を担当している。

手話や手話通訳と聞いて多くの人が連想するのは、障がい者福祉の領域ではないだろうか。それはもちろんとても大切な視点であるのだが、それだけでなく、手話は音声言語とは異なる、独立した自然言語であるというとらえ方が非常に大切だ。手話「通訳」を目指す、あるいは生業とする以上、通訳者とは、異なる二つの「言語」を用いてコミュニケーションの仲介をするプロフェッショナルだという認識とその認識に基づく学びが欠かせない。手話通訳は福祉領域で働く専門職であると同時に、なによりも先ず言語通訳なのだ。

言語には必ずその言語を用いて生活している「社会的集団」が存在し、その集団で形成され共有され継承されてきた行動様式＝「文化」が存在する。音があるのが当たり前の世界と音がないのが当たり前の世界とでは、おのずと「文化」が異なる。聴者が手話の世界を訪れ、そこで生きようとするということは、ろう者社会という異文化集団に留学するようなものだと、私は考えてきた。



筆者が実行委員兼手話通訳として参加した「第17回関東ろうあ青年の集い」＝東京都で1987年、集い実行委員会撮影

(2) 行動様式の違い 2020年11月14日刊行

手話で会話する時は、まず、相手と視線を合わせること（アイキャッチ）が必須だ。手話話者（ろう者）にとって視線を合わせる／集めることこそが「これから会話／情報提供を始めます」という合図になる。視線を「合わせない」「外す」ことは「私はあなたと会話する気持ちがありません」ともとられかねない。

会話対象を明示する時には「指さし」がためらいなく使われる。「触れること」もそれほど禁忌扱いされない。軽く相手の肩や腕をたたいてアイキャッチを促すことは失礼に当たらないし、年齢や性別にかかわらずいわゆる「ハグ」にも抵抗がない人が少なくない。

太っている（太った）／痩せている（痩せた）、老けた／容貌が変わったといった視覚的特徴やその変化は聴者文化では明言を避ける傾向が強いが、手話話者の間では指摘（言語化）が許容されやすい。また、イエス・ノーがはっきりしていて文脈に依存しないコミュニケーションを好む傾向がある。

ただし、これらはいくまでも「日本の聴者文化と比較した時に」ということであり、許容の程度には個人の判断や差があるのが手話学習者にとって難しいところだ。通訳者にとっては、このような文化の違いをどう翻訳するかが、悩ましくも腕の見せ所ということになろう。



所属企業の社内研修会で手話通訳する筆者（右）
＝1990年、研修会主催部門担当者による記録写真から

(3) 手話は言語 2020年11月21日刊行

手話は手の「形・位置・動き」というそれぞれは意味を持たない最小単位を組み合わせることで沢山の語彙を作り出し、その語彙をルールに則って連ね・活用することで文を創出する。有限個の最小単位を使って無限の文・文章を作ることが出来るという意味で、音声言語と同等の構造を持つ言語である。また、視覚言語である手話には手には表れない重要な要素がある。眉・目（線）・頬・口（口形・舌）・肩などの動かし方などが文法として機能しているのだ。

手話による談話のスタイル（戦略）は、手話が視覚言語であることや手話話者の行動様式とも連動していると思われる様々な特徴を備えている。例えば、主題を文頭で示すことを好むとか、質問にはまずイエス・ノーをはっきり伝えた後に理由を付加して述べる必要があるとか、表現は抽象よりも具体を得意とし出来事を時系列に沿って詳述する傾向があるとか、数え上げればきりが無い。

聴者の学習者がネイティブ並みに使いこなせるようになるには相当な努力が必要だ。ほんの数分程度のネイティブの手話動画を分析的に見るだけでも、ネイティブの手話の巧みさに舌を巻き、学習者としての自分の手話力の限界を知ることになる。つまり、手話を学ぶということは、一つの外国語を習得することとなんら変わらないことなのだ。



筆者が主催した「みんなばくで手話言語学を学ぼう！2019」＝大坂府吹田市の国立民族学博物館で2019年12月、事務局記録写真

100人の手話話者（ろう者）の中に手話を解さない聴者が一人紛れ込んだ時、どんなことが起こるかを想像してみてほしい。手話が言語であるというとらえ方から社会を見渡してみるとマジョリティとマイノリティ、障がい者と非障がい者、常識と非常識といった区分がいと簡単に「逆転」することに気づくはずだ。

自分はずっと、音があることをあたりまえとするマジョリティ集団を現所属としてもちながら、音がないことをあたりまえとするマイノリティ集団にアプローチしつづけてきた。異文化集団にアプローチしようとする時もっとも大切なことは、その集団に対する敬意と、共生のための努力であろう。それは、手話話者と聴者の関係にも言えることだ。

コロナ禍という環境下、緊急事態宣言発出期間中の都道府県首長記者会見等に手話通訳が付与され、メディアによって取り上げられる機会が増えた。非常時にどうしても取り残されてしまいがちなマイノリティ集団への情報保障の必要性が、これまでなかったほどに、マジョリティ集団メンバーの多くに認識されたことには大きな意義があったと思っている。

これを機に「言語としての手話」や「異文化としての手話話者（ろう者）」への関心を持つ人が更に増えてくれることを願っている。



「みんなく手話言語学フェス 2015」で手話通訳する筆者（右）＝大阪府吹田市の国立民族学博物館で2015年9月、主催者記録写真